

市長と住民の「こんだん会」
～臥雲市長にアタック！地域の元気な声を届けよう～
白板地区開催報告

- 日時：令和5年3月11日（土）午前10時～11時40分
場所：白板地区公民館 大会議室
テーマ：「白板地区をつなぐ、顔の見える関係づくり」
～ 笑顔と躍動感あふれる白板に ～
参加者：26名（市長、スポーツ推進課長、公共交通課長、白板地区スポーツ協会3名、放光寺町会移動支援推進委員会3名、松本大学4名、傍聴者9名、地域づくりセンター職員4名）



【懇談内容】

1 白板地区スポーツ協会の活動について

(1) 白板地区スポーツ協会の概要

白板地区スポーツ協会は、平成元年に「白板地区体育協会」として発足。令和3年から「白板地区スポーツ協会」に名称変更した。役員数は約50名で、町会長、町会体育部長等で構成している。第5ブロック体育協会として、城北・中央地区と合同で事業を行っている。

(2) 主な活動と取組み

ア 白板地区大運動会

平成13年度に参加者120名で始まり、令和4年度の開催で20回目を迎えた（新型コロナウイルス感染症のため、途中2回中止）。毎年5月の第3日曜日に開催しており、松本市内で一番早く開催される地区運動会である。



これまで、延べ5,600名の白板地区住民が参加。0歳児から90歳以上のお年寄りまで、誰もがピクニック気分で訪れ、どの年代にも「楽しかった」と言って帰ってもらえるような競技となるよう工夫している。

イ 市民スポーツ大会について

大会の全競技にエントリーできるよう、選手の発掘を兼ね、各種スポーツの体験会や懇親会を計画している。市民スポーツ大会では、選手が競技に専念できるよう、応援や弁当の手配など、役員が選手をバックアップ。総合結果の最高順位は7位。役員、選手参加の結団式や解団式を行い、相互の交流を図っている。

(3) 白板地区スポーツ協会の課題

ア 主催事業（各種スポーツ大会）への参加人数の減少

市民スポーツ大会に向けた選手の発掘が困難。

イ 地区住民の高齢化

野球やゲートボールなど、専門性の高い競技者を集めるのが困難。

ウ 練習場所の確保

地区内に野球の練習場所がない。

<市 長>

大運動会は、どのくらいの地区でやっているのだろうか。素晴らしいと思う。

若い世代の方も、自分たちなりの価値観が反映されるのであれば、参加したいという気持ちを持っていると、私は感じている。遊びに近い競技を、世代を超えて、1年に1回、大運動会を開催するという事は、時宜にかなっている。コロナ後のリ・スタートにあたって、白板地区大運動会が他地区のモデルになるよう、ホームページなどで紹介する手段も考えていきたい。

スポーツの種目は、すごく変化している。市民スポーツ大会の種目も見直す時期に来ている。私自身、松本市スポーツ協会の会長なので、より大勢の方が世代を超えて楽しむ、そういう方向に市民スポーツ大会も進んでいければよいと思う。

令和5年4月から、中学校の部活動は、土曜日・日曜日は原則的にもう学校で引き受けるのではなく、地域や民間のクラブ活動などで引き受けていくように、松本市としても積極的に進めていこうとしている。スポーツだけでなく、音楽や文化もそうだが、子供たちが好きなことにチャレンジできる環境を作ろうと思えば、どうしても学校単位では限界がある。地域の部活動の移行にあたって、様々な関わりを持っていただけのように、我々からもお願いしたい。



(スポーツ協会)

白板にはもうひとつ、総合型のスポーツクラブ、丸の内スポーツクラブがある。丸ノ内中学校の体育施設を使い、年1回ファミリースポーツカーニバルなどを開催している。子供が中心になって、ニュースポーツやお遊び系のゲームなどをしながら、地域交流をしている。スポーツを通して、地域のまとまりが非常にいいと思う。

(スポーツ協会)

中学校の部活の件は、進展の状況がわからない。需要と供給、こういう部活があって、指導者が何人ほしいとか、そういうことがさっぱり伝わってこない。

<市 長>

3年くらいかけて移行しようとしているので、まだ白板地区の皆さんに具体的なことをお伝えする段階になっていないかもしれない。松本市では、4つ程度のモデルケースを4月から始め、課題などを皆さんと共有し、段階を踏んで進めていきたいと考えている。

(スポーツ協会)

年度の最初にやる運動会が一番メインと考えて活動している。コロナ禍で参加人数が減ってしまったが、また300人、400人とどんどん増えていくと思っている。地区の方と楽しめればいいかな、と思っている。

2 放光寺町会移動支援「お互いさまタクシー」の取組みと課題

(1) 移動支援を実施に至った経緯

勾配の急な坂道に加え公共交通（路線バス アルプス公園線）の利便性が低く、89.7パーセントの方が自家用車を利用している。50名以上の独居高齢者や運転免許証の返納を検討している高齢者など、移動困難な方が多い。

民生委員からの課題提起を受け、令和2年に放光寺町会移動支援プロジェクトを立ち上げ、移動困難者への対応を検討した。令和3年1月、全世帯を対象に「日頃の交通手段、移動支援に関するアンケート調査」を実施した。同年3月に松本大学の支援を得て「お互いさまタクシー」事業を試行。同年4月から、本事業として取り組んでいる。

(2) 「お互いさまタクシー」の活用

個人的な通院や買い物のほか、町会主催の買い物ツアーや茶話会などの町会行事に参加する際に活用している。

(3) 「お互いさまタクシー」の利用実績

令和4年の利用台数536台、利用者数862人、利用金額892,520円、町会補助額411,150円となり、前年同期に比べ、利用台数は2.84倍、利用人数は2.38倍、利用金額は2.85倍、町会補助額は2.69倍に増加している。

(4) 「お互いさまタクシー」の現状と課題

現在は126名が利用者登録している。令和3年3月1日～5年2月28日の24カ月で776台、延べ1,323人が利用(1.7人/台)した。

資金を減らさないため、町会一般会計から年20万円充当。応援バザーを開催したほか、「お互いさまタクシー」通信に応援企業を掲載し、広告収入を得ている。

ふるさと納税を活用した資金調達の仕組みづくりを市に提案している。市の公共交通体系見直しのなかで、行楽対応路線として位置づけられているバスを利用する地域住民の意見が反映されるように提案している。



(5) 「お互いさまタクシー」を持続するために

町会に「いくつになっても安心して住み続けられる」ために、移動支援事業は「他人ごと」から「自分ごと」、そして「地域ごと」へと町民の意識が変化しつつある。

共助の割合が高い住民が、主体的に取り組む支援事業として定着しつつある。共助で担いきれない部分は、市の支援(公助)により、町民が必要とする事業を継続することが必要。

市の事業になれば、「ふるさと納税」の使い道として選択でき、町民、町民につながる町外・市外の親戚、知人などの関係人口から支援が得られる仕組みが可能となる。

移動支援の目標は「安心して住み続けられる地域社会づくり」である。

3 買い物支援に参加している松本大学生の意見

松本大学では、放光寺町会移動支援推進委員会、民生委員の協力を得、昨年度3回の買い物ツアーを行った。あらかじめ、移動支援推進委員会、民生委員とで現状や課題を話し合い、実際に住民利用者と一緒にお互いさまタクシーを活用して、なぎさライフサイトに行っている。

買い物中や終了後に、「お互いさまタクシー」事業のよい点、改善点などをヒアリングし、ツアー終了後に今後の課題や意見などを話し合っている。



本日は学生4名から、「お互いさまタクシー」利用者の感想や意見を、それぞれの観点から発表する。

(松本大学生)

よい点は、ルートや運行時間を考慮せず支援を利用することができるという点。利用料金が1回千円なので、多くの人乗り合いで利用すれば、一人当たりの負担が少なくなる点。

(松本大学生)

利用者からは、「誰かを誘って乗らなくてはいけないため、自分の買い物に付き合わせてしまっているのではないか」という声があり、利用者にとって負担となっている。「お互いさまタクシー」を個人で利用することに加えて、日時が決まった「イベント、買い物ツアーなどを定期的に開催してほしい」という要望もある。日時が決まっていることで、まとまった人数が集まり、自分でタクシーを呼ばなくてもよいという利点が考えられる。

買い物ツアーは、皆が集まって買い物に行く。買い物が早く終わる方と長い方がいるので、タクシーを呼ぶタイミングも考慮する必要がある。参加者に合わせて、ある程度時間を決めた方がよいと思う。

学生と一緒にこの買い物ツアーに行くことで、利用者はいつもより多くの品物を購入している。実際に店舗に足を運び、自分で買い物するというのが、利用者にとっての楽しみとなっている。

(松本大学生)

買い物ツアーには、民生委員も一緒に参加している。民生委員と一緒にいることで、「この方は足がちょっと不自由だから付き添ってあげて」など、利用者の情報を事前に教えてもらえるので、学生も安心して参加することができる。だが、買い物ツアーを定期的に行っていくことで、民生委員の負担が大きくなってしまふのは、また違うと思う。

<市長>

この高齢者の移動の問題は、病院や買い物へ行くことなど、自分たちが暮らしている小さな地域の中で、どのようにアプローチをすれば解決できるのか、というところから始まった取り組みだと思う。かつてのゴミ問題や防災の問題と同様か、それ以上に、これから地域や町会が取り組んでいく、非常に優先度の高い問題が「移動」ということになると思う。そういう意味で、「移動」という問題を町会や地域という単位で真正面から取り組んで、今進めているのが放光寺町会。これは間違いなく、松本市全体にとって、町会や地域に共通の問題である。

「移動」について大きく分けると、定時定路線型とオンデマンド型になる。定時定路線型とオンデマンド型を組み合わせる。オンデマンドは、かみ砕けば「必要に応じて」「随時」ということ。究極のオンデマンド型は、自家用車。オンデマンド型の中にも、放光寺町会が取り組んでいるタクシーという業態を利用するオンデマンド型、あるいは新村地区のように車両と運転手を地域で確保して、タクシー業者より費用を抑える形のオンデマンド型。いろんなパターンのオンデマンド型が、可能性として考えられる。それを一本化するのではなく、それぞれの地域に応じ、何を優先して、何を抑えるか。市民の皆さんの望むことを、それぞれの皆さんが選択していく、ということが必要になってくる。

もちろん究極のドア・ツー・ドアが便利なこと間違いはないが、どうしてもそれはコストがか

さむ。どこで折り合いをつけるかという問題がでてくる。放光寺町会では、この取組みを継続して行っている。どこに課題があって、その課題は乗り越えられる課題なのか。どこかで軌道修正が必要なのではないか。そういうことを、皆さんと一緒に考えていきたい。

やはり持続可能という点で、単位が小さければ小さいほどうまくいくこともあれば、スケールメリットをもう少し働かさないと物事が進まないということもある。そういうことを私は放光寺町会の皆さんの今の取組みとしっかりと伴走しながら、何がどこまで、この方向で、この方針で行けるのかどうかを把握し、そしてまた我々なりの提案をしていきたい。

ふるさと納税の問題は、少し私にとって目から鱗だった。受け皿の作り方次第では、ありうるかもしれない。放光寺町会の「お互いさまタクシー」にお金を出していただける方は、限界もあるだろう。だが、自分の故郷だとか、今は松本にいないが松本に何らかのゆかりがある方が、松本市の地域ごとの移動支援を応援したいというところまで我々がもっていければ、このふるさと納税というものが資金調達の一つになりうるかもしれない。

買い物ツアーに大学生が参加してくれることなど、年齢層の高い方の多い地域では、どれだけありがたいか。どれだけ地域や集まりにとってエネルギーになるか。松本においては、学生だけでない若い世代にとって、逆に自分が住んでいない地域のほうが何か参画しやすい、ということもあるかもしれない。こうした信州大学や松本大学の大学生を中心とした若者が、松本の地域とか、町会に関係性を持てるか。関係性を持てるチャンネルや仕組みをもっと増やしていく。広げる。いろいろなものを動かすエネルギーとなる。もっともっと、松本市がしっかり大学や大学生と橋渡し、つながりを持つということが、動かしていくために大切なことだと思う。

(放光寺町会移動支援推進委員)

移動支援「お互いさまタクシー」について、新事業として取り組んできたが、当初の想定より大幅な利用実績があった。地域の皆さんから、大きな期待が寄せられている。私ども役員は、ひしひしと、これを感じている。

(放光寺町会移動支援推進委員)

今日は、こういう機会があり、いろいろな話を聞いて本当によかったと思う。今後も大変なことはあると思うが、皆さんと共にやっていきたい。ぜひ行政の方の力をお借りしたいと思うので、よろしく願いたい。

(放光寺町会移動支援推進委員)

昨秋、宮之本副市長を放光寺公民館に招き、いろいろな話を聞いてもらった。私も後期高齢者になり、タクシーの利用とか自動車運転免許の返納といったことを考えると、やっぱりこれは本当に今最重要な課題だと思っている。やっと、この事業の若い芽がちょこちょこ出てきたところなので、ぜひ今後も継続して力添えをお願いしたい。

(松本大学生)

放光寺町会だけではなく、松本市全体としても高齢化が進行している。松本市の人口推計では、2040年には高齢化率が34.6パーセントになると推計されている。免許返納を考えている高齢者が、その返納後の生活を考えたとき、やはり簡単で利便性が高く、利用できる移動手段がなければ、免許返納を躊躇してしまうことにも繋がっていく。

放光寺町会では、その住民が主体となって考えた「お互いさまタクシー」に乗り、買い物ツア

一の際も多く多くの住民が「本当に助かっている」と話していた。今後、継続した事業にしていくために、住民の共助では担いきれない部分は、やはり公助で担うということが必要だと考えている。私自身、今後の専門研究で考えていきたいと思っている。

（放光寺町会移動支援推進委員）

この事業を継続的に実施していくため、放光寺町会の役員とは別に「移動支援推進委員会」を設けている。新事業として取り組んでいると、課題が必ず出てくる。その都度、改善に改善を重ね、住民・市民の声を十分聞き、解決策を求めて、必ず成功に、「最後までやり抜くぞ」という気持ちで取り組んでいく。

<市長>

放光寺町会の方から、「やり抜くぞ」という言葉があった。

本当に私は、今回の放光寺町会の移動支援の取組みは、松本市にとっていろんなブレイクスルー、物事を突破する、現状を打破する、その先にこの未来を構築する、そうした可能性を秘めていると思っている。かつてはゴミが、少し前からは防災が最重要課題として位置づけられていた。

これからは、「移動」が一番の町会の仕事になる。あるいは、移動が仕事になるような町会になる。そういうふうに変わってくる。そのことを今、可視化してもらっている。いろいろな人たちに見えるような形に、放光寺町会の移動支援の取組みをしていただきたい。私たちも、ずっと伴走し、最後までしっかり、完成をるところまで、一緒になって、この取組みを成し遂げたいと思う。同じスタイルということではないが、移動という意味では、おそらく松本全体に波及することになっていだろう。地域、あるいは町会とは、自分たちの未来を変えていくための、解決していくための組織だ。



そして、公助の力を上げなければいけない。我々の公助の力の源泉は、若い世代、現役世代だ。シンプルに言えば、納税する人たちの数であり、力が公助の源泉。今、私たちは子供が主人公のまちづくりをしている。女性や若者に選ばれるまち。そして、希望や結婚や子育ての希望がかなえられるまち。それは、みんな公助の力を上げるため。若い世代が、女性が松本というまちに住みたい。松本のまちで結婚し、家族を築き、子供を希望通りに育てたい。そこで働き、そして今日のような形で地域に参加し、税収は上がる。そして、その循環で様々な公助の要望に応えていける。子供が主人公のまち、女性や若者に選ばれるまち、そのことなしには高齢化に耐えられるまちになりえない。

ようやく今、国が少子化という問題を最重要課題の看板に掲げた。大事なものはレベルではなくてベクトルだ。レベルというのは水準、ベクトルというのは方向性。少しでも上がっていく。少しでもよくなっていく。そういうときに私たちは希望を持つ。そのためには今、絶対数が多い若い世代に、もっともっと力を発揮してもらえるような社会に、地域に、松本をしなくてはいけない。先ほど「自分ごと」「地域ごと」という言葉もあったが、今よりも、もっともっと若い世代にそういう気持ちになってもらう。そのために、私たち上の世代がやるべきことはなにか。

ぜひ皆さんと一緒に、そういう方向で取り組んでいきたい。